

土曜、午後七時四十八分。F 駅の指定された場所に着いた英達は辺りを見回してみる。  
招待状と同じロゴマークが入った腕章をつけた男のそばには、既に八人の参加者が集まっていた。  
英達と歳の近そうな中高生の男女や、大学生らしき若者に社会人風の男。……綾華の姿はない。  
「まだ来てなくてよかった……アイツより遅れて着いたら、何言われっか分かんねーからな」  
以前、定刻通りに行行って怒鳴られた映画鑑賞を思い出して、英達はこっそりため息をついた。

GM：では、待ち合わせ場所の夜の駅ですね。シーンプレイヤーは英達で、他 PC は登場不可です。  
英達：……遅れたら何を言われるか怖いから、早く行く。……10 分ぐらい前に行くかっ。  
GM：それじゃ、後から登場して「うわあ、早いね～っ！」って言ってます。  
英達：「ん、うん」と言いつつぼそつと「だってびったりに来たってそっちが早かったら何か言うじゃん……」と（一同笑）  
GM：まあ、何も聞こえなかった（笑）。で、集合した、と。

「これで全員集まりましたね。テスト会場は F ホールとなっていますので、行きましょうか」  
「F ホール」 「F 市立総合展示場」というのが正式名である。いわゆる文化ホールだ。  
「F ホールでよかったね。夜の『開発区』なんて暗いし怖いし、歩きたい場所じゃないもんね」  
「……お前に怖いものなんかあったのかよ？」  
「ちょ……失礼なこと言ってくれるわね、この華奢な乙女に向かってっ」  
列の最後尾で無駄口を叩きながら、英達は正面に見える F ホールから視線を斜め奥にずらした。  
そこから先は「開発区」が広がっている。パブル崩壊と共に廃棄された“空き地と廃ビルの街”。

「……ッ!？」 ほんの一瞬、身震いするような嫌な予感が背筋を貫いた。首を振って振り払う。

「あ、英ちゃんも暗いのは駄目なんだ？ 震えちゃって～……私が守ってあ・げ・るー」  
「何言ってた、自称“華奢な乙女”が。それに後ろから抱き付くな、重……何デモゴザイマセン」  
後ろから首っ玉にしがみつかれたまま両腕で締め上げられ、英達は腕を叩いて降参を示した。  
綾華を促して F ホールに踏み入れたときにはもう、先ほどの感覚は消え失せていた。

\* \* \*

GM：内部はいくつかの仕切り板で部屋を作っているのですが、そのうちの一室へ案内されます。  
机と椅子が数セット置かれた前方に、すらっとした 20 代ちょい過ぎの男性が立っていますね。  
英達：ゲーム雑誌とかで見覚えは？  
GM：英達にはないね。彼は渋谷修治と名乗って話し始めます。「ようこそ、“Project Judgement”へ」

「“Project Judgement”は先端技術をフル活用して作られた、体感型ネット対戦格闘ゲームです。  
従来の格闘ゲームのようにヒーローを操るのではなく、皆さん自身が、ヒーローとなって戦う。  
その面白さを、明日は存分に味わってください。……それでは、説明の方をお願いします」  
再び軽く一礼した渋谷と入れ替わるように、係員が出てスライドのスイッチを入れた。

---

F 市立総合展示場 ゲームショーも開催されている某国際展示場（ピッ サイト）をご想像あれ。

GM：筐体はポッド型です。<sup>ヴァーチャル・リアリティ</sup>仮想現実と 言っても<sup>かぶ</sup>ゴーグルを被るのではなく、機体にはまるタイプ。  
譲：(重々しい調子で)なるほど。ハマるゲームだな。  
GM：そうね、ハマるかも(苦笑)。ウまい!(サムズアップ)

「テスト参加者の皆さんには、これから別室<sup>す</sup>に据えられたポッドに入ってくださいませ。  
狭いと思われるかも知れませんが、仮想空間に同調してしまえば気になりませんのでご安心を」  
そこで、前に座った少年が右手を挙げた。首にかけたヘッドホンを左手でいじりながら質問する。  
「あう、ってことは、ボクたち密閉されちゃうんですかあ？」  
「ええ、そうですね」係員が苦笑するように答えた。「もちろん酸素は供給されますのでご心配なく。  
今回は 版なので機体との同調に八時間必要ですが、製品版では二分以内を目標としています」

譲：MRI 装置みたいな感じか。

GM：まあ、そんなもんかな。「今回は需要があるか、面白いと思っていただけるか、というマーケティングの意味合いを含んだ テストですね」と説明をしていきますね。ポッドの説明や、どんな映像が見えたり、ゲーム中どうやって動かすのかとか っ、英達寝てる?(苦笑)

久々にシーンが回ってきたと思ったら.....こんなに絡みづらい構成で本っ当にすいません。

GM：こうリラックスした感じで眼を閉じると、もう寝ちゃってんのかなーみたいな(苦笑)。

英達：大丈夫っ。ぼく TRPG の途中で寝たりしないっ!

譲：まさしくポッドに入っている感じだったんだけど(笑)。ここまで<sup>PC</sup>役と同調するとは.....っ。

英達：(システム風の無機質な口調で) 同調シマス(笑)。

GM：(笑)。そうやっていると「先端技術かあ.....っ」と眼をキラキラさせている人が隣に。

英達：(ひそひそ).....お前、<sup>ツブ</sup>壊すなよ。

GM：肘で脇をどつきながら「.....英ちゃんみたいに怪力じゃないもんっ」

英達：(ひそめた声のまま)俺は怪力じゃねえ っ! .....ただの格闘家だ!

高校生じゃないのか。

GM：そんなことをやっている、説明が終わってポッドに入る段階に。(綾華に)何か言う?

英達：とりあえず「壊すなよ?」と(笑)。

GM：そう言われると、ムッとした感じで。「壊さないもん!」

英達：(呆れ笑いを浮かべつつ).....どおーだか。

「んも っ、英ちゃんなんか速攻でダウンさせちゃうんだからっ。.....じゃ、また後でね 」  
ふくれっ面から一転、笑顔で手を振る綾華の後ろ姿を見送って、英達もポッドに手をかけた。

「.....女って本当に分かんねえ」 それとも、アイツが特別なだけなのか.....?

残りの眩きを半ば無意識に飲み込み、<sup>ぶに</sup>蓋の閉まったポッド内で氏名登録を終える。

薄い色彩が<sup>ゆる</sup>緩やかに展開していくリラクゼーション映像を眺めているうちに、意識が落ちた。

---

格闘家だ! まあ、英達のワークス(本質)は「格闘家」なので間違っではない(Preplay 参照)。

UGN・F市支部の会議室。ほぼ二十四時間ぶりに、三人は一堂<sup>いちどう かい</sup>に会していた。  
目前に迫る悲劇の幕開けを感じ取り、平然を装っていた譲は一瞬だけ、苦々しげに眉根を寄せた。

桐子：次は入った情報を持ち寄り、というのでどうでしょう。で、今度のお店は？（笑）

譲：…… UGNの部屋でいいだろ。

GM：なら、シーンプレイヤーは帆島さんでいいかな（カードを渡す）。英達以外全員登場ですね。  
部屋の隅っから<sup>フェイト・インジケーター</sup>“運命の導き手”が様子を窺ってます。びくびく、びくびくっ（笑）

譲：（優しげに）大丈夫、私はあなたを信じています。 信じています、が……**本当のことを**。

……思いっきり、信じてないだろ。それわ。

譲： ここだけの話、ここだけの話、だ（笑）

GM：ほろほろ～っと泣きながら「な、永斗さんみたいなことを言わないでくださいっ!」（苦笑）

譲：（血走った眼で）ししし、支部長……ッ。俺は、嘘が嫌い……だ（爆笑）

GM：結希は「はうう～っ」と鳴きながら、さめざめ泣いています（苦笑）

譲：冗談はさておき。 呼び出したのは他でもありません。実はこのようなことが分かりました。

GM：はいな。まず最初に彼女の方からいきますと （一同大爆笑）

譲：（げらげら笑いながら）散々<sup>カッコ</sup>格好つけた台詞で始めたのに、桐子からなのかつ!!（爆笑）

一同、超爆笑。しばしプレイが滞るほどである。

……だって、桐子が得た情報の方が核心から遠目で、なおかつ情報量が少ないんですもの。

しかし、プレイヤーの意図を無視して進行するのはよくありませんな。GM反省……。

\* \* \*

「実はこのよ……」

「あ、私もこんなことが分かりましたあ <sup>でばな くじ</sup> ！」

勢いよく手を挙げて桐子が言った。出鼻<sup>でばな</sup>を挫<sup>くじ</sup>かれた譲<sup>にら</sup>が睨むが、気付かないまま喋り始める。

「“Project Judgement”は中小ゲーム会社の共同企画だそうですけど……実は架空<sup>ペーパーカンパニー</sup>企業でした。全部<sup>ぶつぽう</sup>」  
言いながら、鞆から一枚の顔写真を取り出す。切れ長の眼をした涼やかな風貌<sup>ふうぼう</sup>の男が写っていた。

GM：裏に、“Project Judgement”代表者・渋谷修治と書かれています。

桐子：……なるほど。

---

永斗さん “ガンズ&ローゼス”上月永斗（こうづき・ながと）のこと。かつて結希と共に戦ったイリーガルで、自称“伝説の暗殺者”。その射撃の腕は本物だが、言動は果てしなくエキセントリック。譲のプレイヤーが愛して止まないキャラのひとりであり、本文中の「ここだけの話」の辺りは過去に部下殺しの嫌疑について永斗が彼女に詰問したシーンを模したものである（『聖夜に鳴る鐘』参照）。はうう～っ 結希の“鳴き声”のひとつ。主に困って泣いているときに出てくる。ちなみに主な鳴き声は「はにゃー」。……そう鳴かなければ本物の結希ではない、らしい（by 檜山ケイト）。

桐子の報告が終わると、渋谷修治の写真を矯めつ<sup>た</sup>吵めつ<sup>すが</sup>していた譲が今度こそはと口を開く。  
「では.....次は私が報告しよう。鶴来さんの言っていた斎木病院に関してだが。  
死亡した我が UGN のエージェントたちは、この病院に FH からと思われる身元不明金が献金<sup>けんきん</sup>されていることを突き止めていたのだ。その受け取り相手は、失踪した外科部長・目白香奈恵。  
そのあたりから、彼らはこの病院が FH の研究施設になっているのでは、と疑っていたようだな」

譲:(ニヒルな声で).....フツ。 読めたぞ。

秀真:ん?

譲:彼女は実は UGN のスパイだ。始末されたんだ! 私の.....緑色の脳細胞が、そう告げている。

GM:緑なのかよ!! .....カビ生えてるっ!?

譲:血は、.....青だ。

桐子:ひょっとしてグレイとかですか?(笑)

譲:違うっ! ナ ックだ!!

そんなネタかよ。

GM:.....それはともかく。報告会をしていると、パサパサッという軽い羽音が聞こえてきますね。

譲:む、この音は! 奴が来る。

桐子:奴?

譲:(キッパリと)ウチのインコのルージィだ。

桐子:「マリ もいるんですか~?」って(笑)。ゲームライターですから。

GM:.....それ以前にインコじゃねえよ!(笑) 支部の窓の棧<sup>さん</sup>に雀<sup>すずめと</sup>が留まっていますね。

桐子:(呑気<sup>のんき</sup>に)あー、入っちゃうと出られなくなっちゃいますねえ。窓、開けない方がいいですよ。

GM:中に入れて欲<sup>く</sup>しそうにコンコン嘴<sup>くちばし</sup>で叩いてますよ。

譲:(ピンときて)窓の内鍵をカチャッと開けて「ネームレス!!」

GM:ええ、雀は中に入ってくると「このような姿で失礼。.....私が、ネームレスです」と(笑)

桐子:(無邪気<sup>むじゃ</sup>に)わあ.....小っちゃいですねえ。米粒、食べますかあ?

「.....いや、遠慮しておきます」そう言うと、雀はどこからともなく A4 の封筒を取り出した。

受け取った譲が読み上げる。「何々、F 市支部長からご依頼の調査結果です.....?」

『ご依頼の件について、FH のデータベースを探ってみました。

その結果、“見えざる神の手”のコードネームで呼ばれるエージェントの本名は「渋谷修治」だということが判明しました。データベースから引き出した顔写真を貼付しておきますので参考に。』

GM:で、切れ長の眼をした涼やかな風貌の男の写真がついていますね。

桐子:ということは、ナニ ゲームを作っていた人が FH の人だった、と。

---

ナ ック 『ドラ ンボール』に登場する民族で、 ッコロ大魔王が有名。が、血は紫だそうである。  
ネームレス ある時はスミス、またの名を鈴木.....と誰も本名を知らない謎の情報屋で、永斗がよく利用している。本人も滅多に人前に出ず、結果報告も動物を操って資料を持っていかせることで有名。操る対象はカラスからフナまで実に幅広く、その全てが A4 の封筒を懐から取り出すという特技を持つ。

英達：え。アレ……オープニングのときにさ、死んだ 熊五郎さん？ 熊次郎さん？

**オープニングを見れば分かるが、正しくは熊「太」郎である。**

GM：もう、どうでもよくなってきてるね、“熊”の名前（苦笑）

譲：（裏返った悲鳴で）もう名前を間違えるな、間違えるんじゃないっ!?（笑）

英達：その、熊太郎さん自身が殺されかけてたってことは、その“支部長”と対面してた訳でしょ？

譲：でも支部長は「違う」と言っていたぞ？

英達：いや、最初“支部長”って呼びかけてるってことは「支部長の“格好も”してた」んじゃない？

GM：そうだね。音声から察するに、彼は目の前の“誰か”を支部長と勘違いしていたフシがある。

譲：フ、読めたぞ。……プラムストーカーだな、多分。

GM：……まあ、英達はシーンにはいない訳だが（苦笑）

英達：あ、プレイヤー発言でごめん。さ、ささっ。（シーンに）戻って戻って！（笑）

譲：とは言えこの結論は……そ、そうか！これが、**緑色の脳細胞の本領発揮ッ！（一同笑）**で、報告書をパラパラ読んで真顔で（張りのある低音で）「**ご苦労様でした、ホームレス!!**」と叫ぶ。

GM：**ホームレスじゃないよっ!?（笑）**

英達：（笑いをこらえながら）……ヒドい……っ（笑）

GM：「……何か聞こえたようですが、聞こえなかったことにしましょう」

桐子：あうう……資料を見て頭を抱えます。これ、記事に出来ないじゃん、もう……。

GM：あと、“見えざる神の手”は現在F市「開発区」の一角で活動しているようですね。雀はあなたたちを見ながら「どうやら、ことは急を要しそうですね」と言います。「資料の二枚目 そう、それです。“Project Judgement”。その会場は、お捜しのエージェントの活動場所と非常に近い」

譲：ふむ。悪いことに 確か、それに参加している人間をひとり、知っているのだが……。

桐子：あたしも 知ってます。咲島綾華さんが今、参加しているはずですよ。

秀真：何てこった……。

桐子：っていうか、携帯取り出して電話するよ。心配なもの。

GM：どちらにもかけてみましたが、出ませんね。

英達：（営業ボイスを作って）「……留守番電話サービスです……」って（苦笑）

**一方、緊迫感溢れる桐子の隣では。**

譲：私はどこからともなく虫捕り網を取り出す。

GM：え？（笑）

英達：雀、捕まえるつもりかお前っ（苦笑）

譲：（ギラギラした眼で）喋る雀……（笑）

**……ナニをやっているのか。アンタわ。**

---

**オープニングの～** 「男である」「ザ・フェイト」がオープニングで UGN エージェントに「結希と間違えられた」ことは、彼の能力（シンドローム）に関する非常に重要なヒントである。そのため、GMはその場にはいない英達の質問にも答え、その思考を助けるようにしている。

**プラムストーカー** シンドロームのひとつで、血液を操る。姿形の不定な“血の従者”を作って意のままに操る能力があり、譲は“ザ・フェイト”がこれで“支部長”を作ったのでは、と推察した。

桐子：(携帯から眼を上げて).....ヤバいですね。どっちにも繋がりません。

譲：(突然真顔に戻って)急いだ方が良さそうですね。

「それで、三枚目になるのですが.....“見えざる神の手”はF市で“イノセント”と呼ばれる実験体を育てていたようですね。しかし、それについて詳しいことまでは分かりま

息を詰めて聞いていた三人の目の前で。乾いた破裂音と共に 雀の頭部が弾け飛んだ.....!

GM：窓の外を見ると..... FHの特殊部隊が、次々窓を破って飛んでくるよぉ～

桐子：ぎゃああああっ!?(笑)

GM：ま、広い部屋ですから。初期配置のエンゲージは分かれています! (笑)

FHの特殊部隊が5グループ現れます。1グループ10人のトループね。戦闘ですっ!!

\* \* \*

GM：A & B・C・D & Eでそれぞれ1エンゲージ。PC側との位置関係は、そちらの好きでいいよ。

譲・秀真・桐子：敵とのエンゲージはしてない、で。

GM：では、そっちの三人は固まる? 分かれる?

譲：俺はあ..... (桐子の方をチラッと見て)エンゲージしてたいなあっ、してたいなあ～(笑)

桐子：イザというときののためにしてます。ていうか、一緒にいたんだし1エンゲージでいいんじゃない?

秀真：じゃ、それで。

## 第1ラウンド

GM：では、セットアップからどうぞ。

秀真：お、《戦術》か。

敵が来た瞬間に銃を構えて「散れっ!」と。

実は散開どころか固まっているのはご愛敬である。

桐子：《戦術》ってどんな効果だっけ?

秀真：対象が自分以外三人までだから.....二人の能動行動にダイスポナス1個がつく。

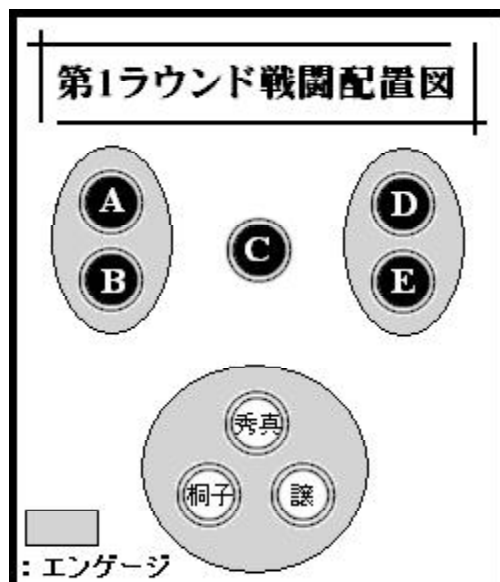
桐子：ありがとう。

秀真：(嬉しそうに)で、振り向きざまに撃つか!

英達：振り向くの!?(笑) 後ろからだったのか。

GM：いいんじゃない? 格好いいから(笑)。

秀真：左のトループAに射撃するぞ。《達人の技》でそっちの防御行動にダイスペナルティが3個入る。



1グループ10人 トループ(雑魚)を構成する個体数は往々にしてそのHPと同義である。この戦闘はいわば慣らし的なもののひとつなので、こうしてさり気なく敵の強さを教えているのである。

《戦術》 とっさに判断した戦術で仲間の能動的な行動をフォローするノイマンのエフェクト。

《達人の技》 天才的な技量で相手を追い詰め、その防御行動を鈍らせるノイマンのエフェクト。

GM：うい。……やべえ、1/10でファンブルするっ(苦笑)。

達成値は11か……(ダイスを振る)やった、14で回避。トループA、偉~いっ!(笑)

譲：では、《ショック》をDに。せいっ(ダイスを振る)……12 + RC 4レベルで16。

GM：……む、回避失敗。Dは[昏倒]で戦闘不能状態だね。

桐子：あたしは《インビジブルハンド》+《魔王の理》で範囲攻撃です。一番数が多いので、AとBのエンゲージに。(ダイスを振る)一回クリティカルして、達成値17。

GM:(ダイスを振る)……お、Aは27で回避~っ。Bはクリティカルしたけど、当たり。ちえっ。

桐子：ダメージはダイス2個か。(ダイスを振る)11……の、攻撃力足して16点。

GM：16う？ そりゃ一発で消し飛んだわ、B(苦笑)。「うわああ！」とか言いながら(笑)。

譲：よ、弱ッ(笑)。一応、このラウンドで「支部長、増援をっ！」とか叫んどいていい?(笑)

GM：いいよ。来る前に終わりそうだが(笑)。……で、トループの番か。行動可能なA・C・Eの全員で、PCのエンゲージにアサルトライフルを撃つっ!(笑) 範囲が対象だとダイスペナルティ2個だし、当たりそうもないけど……(苦笑)。

**FHの特殊部隊が総がかりで弾丸を浴びせるものの……。**

桐子は数発かすめつつ身かわし、秀真が鮮やかなバック転で避け、喰らったのは譲のみ。

GM：Eのダメージは(ダイスを振って)……てへ、10出ちゃった(笑)。最大ダメージの15点(笑)。

秀真：大丈夫か？

桐子：まだまだ残ってる。

譲：お、俺……Aと合わせて12点喰らったから (わなわな震えながら)HP、あと4っ!(笑)

GM：雑魚の意地を見せつけたぁー!(笑) ……ってトループ、実は結構強いんだけどね(苦笑)。

譲：うむ。じゃあ、次のラウンドだな。

## 第2ラウンド

譲：鶴来さん、頼むぞ！ 当ててくれよっ(笑)。

秀真：セットアップで《戦術》を使ってから、同じ組み合わせでAに。(ダイスを振って)……14。

GM:(ダイスを振る)……えへへへっ、7(涙)。

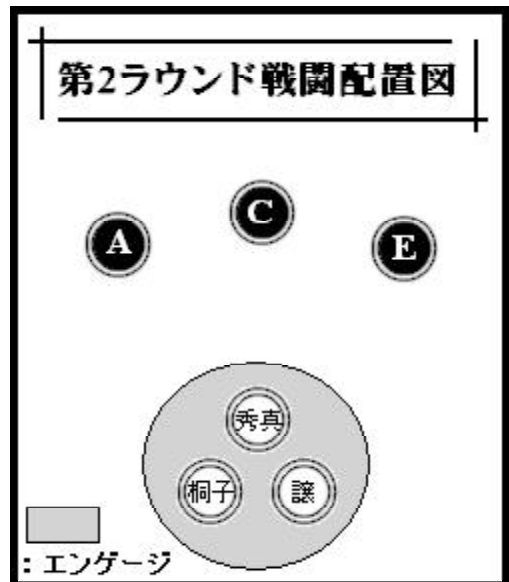
秀真：2個で~2個でえ~…… (ダイスを手の中でシャカシャカ振っている) ほいっ(ダイスを振る)……駄目だこりゃ。11点のダメージ。

GM：なら、装甲で何とか生き残ってるな(笑)。

秀真：何てこったい。

譲： 状況は？

GM：Aが残り2人。CとEが10人。



**1/10でファンブル** 判定で振ったダイスの出目が全て1だった場合、ファンブル(自動的失敗)となる。《達人の技》によって[回避]のダイスが1個になったため、GMはこう言ったのである。

**《ショック》** 神経を過度に刺激する物質を放ち、トループを[昏倒]させるソラリスのエフェクト。

**《インビジブルハンド》** 反重力で相手を空に飛ばしてから地に叩きつけるパロールのエフェクト。

**《魔王の理》** 重力制御に長けていることを示すパロールのエフェクト。クリティカル値が下がる。

その後の展開は、第1ラウンドとほぼ同じ様相を呈した。

トループEは譲の《ショック》で[昏倒]させられ、桐子の重力がトループCを叩きつづす。

英達：トループ最後の根性で達成値20出したのにつ(途中からGM代理でダイスを振っていた)。

GM：ちょー根性出したけど、無駄だったね(笑)。ダメージ18点だから、Cも全滅(苦笑)。

英達：じゃ、Aの2人がへろへろしながらラウンド最後の射撃だね。

GM：雑魚だからクリティカル値10な(苦笑)。

英達：はあい。(ダイスを振って)クリティカルしたぜー!(笑)

GM：したのかよっ!(爆笑)

いついかなるときでも全力を尽くす英達のプレイヤー、味方にも容赦なく全力投球。

桐子だけは持ち前の身体能力でかわしたものの、それ以外の二人はまともに銃弾を喰らった。

譲：回避失敗。ダメージ12点か。死んだので《リザレクト》。(ダイスを振る).....さ、3てえんっ!?

秀真：俺も《リザレクト》。(ダイスを振って).....HPが2点になった。

譲：で、次のラウンド?

GM：応援を呼ぶって言ってあったし、大勢は決したから。もう戦闘終了でいいよ(苦笑)。制圧後に、《気功》とか《ヒール》で治してもらったということで、HPは全快で。侵食率はどんな感じ?

秀真・譲:(揃って)77だ。

桐子:(レコードシートを見て)えっと、64かな。

英達：.....ボク、52い~.....(笑)。あ、でも大丈夫大丈夫! 一撃で侵食率17上がるから(笑)。

一同：ぶはっ!

GM：上がり過ぎ.....(笑)。ともかく、手当てを受けに行くところでシーン、切りましょうか。

重傷の譲と秀真が、治療のために別室に向かう。後に続こうとして 桐子は室内を振り返った。

粉々に砕けた窓ガラス、穴だらけの室内。部屋中に焦げた火薬の臭いが立ちこめている。

そして 床の片隅に.....冷たくなった、雀の死骸。

その“死”の姿に一瞬、ここにはいない二人の姿がダブって見え。桐子は己の想像力を呪った。

\* \* \*

譲:(シリアスに)我々が狙われたということは.....彼も危ないっ! New“熊”が.....!(一同笑)

桐子：あああ~.....綾華ちゃんが.....英ちゃんがあつ.....記事がああー。

一同：記事っ!!(笑)

桐子：だってネタなくなっちゃったじゃああん!(涙)

たとえ身内の危機でも、記者魂を忘れない桐子であった。

---

GM代理で~ これは前哨戦であり、さほど重要でない戦闘だが解決には時間がかかる。その間、英達のプレイヤーがひとり暇を持って余すのを避けるため、代理でダイスを振ってもらったのである。

《気功》 呼吸を落ち着けて気を集中し、HPの回復を行うハヌマーンのエフェクト。

《ヒール》 他者の肉体を再構成することにより、HPの回復を行うモルフェウスのエフェクト。